

駅伝の歴史

工藤 莞司

晩秋からは駅伝シーズン。ファンには一年ごとに巡る待ちに待った時期である。高校駅伝から大学駅伝、実業団駅伝、都道府県対抗駅伝までいずれも男女の大会があるが、何とはいっても、箱根駅伝である。小学生の頃、某新聞で予想を見ては、ラジオ放送を聴いた。兄と二人、炬燵にもぐって最頂のW大学を応援した。縁もゆかりもなく単に名前を知っているだけで、当時から田舎でも周知のブランド大学であったのだ。予想とは違い優勝はおろか上位入賞も敵わなかった。この頃はC大が憎らしい位に強く、6連覇を果たした時代であった。

昭和の終わり頃からはテレビ中継された。そこでは、当然のことながら、自分の母校を応援した。事実は皮肉で、往年の宿敵C大である。おとそ気分でテレビの前での声援には力が入ったが、有力他校の進出に押されて、栄冠を獲得するには一步足りないレースが続いた。思わず罵声を浴びせかけて家内に呆れ返られたこともあった(96年には32年振りに優勝した)。

それでも、応援は続けた。レースを観ながら激励を送ろうと旅館を手配した。箱根は毎年民宿まで満員御礼状態。上には上がいて、1月3日の復路観戦後翌年の同日を予約して帰るのが、箱根ファンとしては当然のことだと知った。大磯在住の同僚に紹介して貰い、上京した兄夫婦とわが家族は揃って応援した。目の前を走る選手は速い。我々が短距離を全速力で走る以上だろう。長男が放送局へファックスしたら、採用されて兄弟での応援が放送されたこともあった。

また、2日早朝には大手町へと出掛けてスタートを観た。ここで兄夫婦はまた虜になってしまった。出発前、各校の応援合戦がレースを盛り上げる。応援団やブラバン、チアガール達が勢揃いし、中には大根踊りまで繰り広げて、対抗駅伝の雰囲気は最高潮に達する。その中を1区走者は走り出す。

来年も、少し離れた地ではあるが、ようやく宿泊先が確保できた。兄へ連絡すると先ずは大手町で1区のスタートを見送ってから、テレビ観戦し往路のゴール後、箱根へと出掛けて、翌朝大平台で6区山下りを観たいと言って来た。しかし、W大、C大とも優勝する力はなく、残念ながら、特にわが母校は翌年のシード狙いだらう。今一応援には力が入らない。

アメフトにみる応援

とみい

プロ野球・Jリーグなどでも様々な応援をみることができ、あいにくTV中継を含め、最近ともに観戦をしておらず、何を書こうか...と悩みましたが、私の好きなアメリカンフットボールでみる応援をご紹介します。

アメフトでは、チアリーディングによる応援が盛んで、アメリカに限らず、日本の試合でも、フィールドサイドでチアによる応援パフォーマンスを楽しむことができます。(チアリーディングはアクロバットな独立したスポーツとして呼ぶこともあります。)

私の出身大学でも女性チアチームが応援部の一組織としてあり、友人が活躍していました。アメフトの試合は、サッカーや野球のように連続性がなく、時間が細切れになるため、応援団の怖い人にこまめに指示され、何度も十数秒の時間でワンドンス披露してくれていました。披露し続けるとやっぱり疲労が溜まるそうです(笑)。

主に、チアはボンボン(ボンボン)を使いダンスすることも多いですが、プラカードを掲げたり、チアスティックを使って客席と一緒に歓声を上げたり、試合以外にも楽しませてくれます。さらに、これを彩るオービック・シーガルズの得点時の特大パチンコ(グッズが客席に飛んできます)キャラクター(鹿島ディアーズの鹿君など)も楽しめます。

日本では、フィールドから盛り上げてもらわないと客席が活気付かないこともありますが、本場アメリカの試合では、ホームチームが守備のときは、歓声を上げてアウェイチームの攻撃のプレー内容が聞こえないように妨害する光景がみられます。TV中継で、プレーが始まる際、静かであれば、ホームチームが攻撃しているのだな、ということが分かります。

秋～冬がシーズンですので、TVや試合会場にて、是非参考にしてご観戦下さい。



【 応 援 】

CHEERING

応援から生まれる相互関係

はむはむ



「日本シリーズ大展望 豪打巨人VSなぜか強い日本ハム」 野球の話である。日本シリーズ開幕前の2009年10月某日、新聞のテレビ欄にはこのような文字が踊っていた。「なぜか」強いとは、なんと失礼な(怒)、と北海道日本ハムファイターズファンの私は憤慨した。だが次の瞬間に、そんなことを書かれるのも無理はない、と悟った。日本ハムには、エースのダルビッシュ投手がいるが、他の選手についてはあまり知らない人が多いと思われるからだ。

しかし、シーズンを通して応援してきたファンには、日本ハムが強い理由が分かっていたはずだ。様々な理由が挙げられるが、一つは、チーム打率 278の打線の好調さである。素晴らしい成績だが、強さの本質は、「繋がり」にある。例えば、エース級投手との対戦時でも、何とかボール球を選び、ストライクはカットし、粘る。フォアボールをもらえれば儲けもの。ファンは拍手を惜しまない。ノーアウトならバントをからめて、ヒット1本であつという間に1点をもぎとる。たとえ凡退してしまっても、球数を投げさせたら、いずれその投手も継投させざるを得なくなる。結果、劇的な逆転勝ちに繋がることもある。「地味」な強さだが、選手全員が自らの役割を理解してチームプレイに徹し、一丸となって勝ちをもぎとろうとする姿は、心に響くし、学ぶことは多い。応援していて、誇りに思えるチームである。

かつて私は、応援するという事は、ストレス発散のような単なる自己満足だと思っていた。だが実際に日本ハムの本拠地、札幌ドームに足を運ぶと、「応援の力」は確かにあると感じるし、試合の流れを変えてしまうこともある。選手の気持ちに応援によって動かされるなら、ファンは喉を枯らしても声援を惜しまない。選手の渾身のプレイによって、ファンも心を動かされるからだ。応援するもの・されるものの心の繋がりが、そこには生まれているのだ。

応援のチカラ

寺澤 久美

学生時代「応援団チアリーダー部」に所属していた。公式戦や四大戦（と呼ばれるG大学・S K大学・S J大学・M大学の運動部定期戦）などがあると、野球・アメフト・サッカー・ホッケー・ラクロス・バスケ・バレー・バドミントンや漕艇など、多種多様な部活動やサークルの応援に駆けつけた。

『応援』って何だろう、と考えてみた。

現役の時、試合を終えた駅伝選手がこうってくれた。

「苦しくて辛くて、もうダメだと思った。でも、チアの応援が聞こえて、頑張ろうって思った。応援団の音が、支えてくれたんだ」

・・・コレだ、と思った。私たちが、声がガラガラになるまで応援する理由。体がヘトヘトになるまで、歌い踊り続ける理由。

直接力を貸して一緒に戦うことは出来ないけれど、だからこそ、「頑張れ」っていう強い思いを声に乗せて選手に届ける。相手に、そして自分自身に負けないで、最後まで戦って欲しいから。

たくさんの勝利の瞬間に出会って自分達のようにくしゃくしゃな笑顔で喜んだり、時には自分達のように悔しんで涙したり…。そうやって選手と一体になって側で応援する事で、様々なスポーツの素敵さとか、チームワークとか、みんなのキラキラした熱い思いとかを感じられた時間。何にも替え難い貴重な時間だった。

「勝利」という結果が出て、もちろん嬉しい。選手が「ありがとう」って言ってくれた時はさらに嬉しい。その嬉しさは格別だから、応援団は選手たちにとっていなくてはならない存在であり続けるのだろう。これからもずっと。

私自身も今、たくさんの人からの応援に支えられ、助けられ、励まされている。その事に本当に感謝したいと思うし、私もたくさんの人を応援したいと思う。チアリーダーとしても、人としても。

みなさんは今、誰かを応援していますか？

